

大学における演劇を教育活動とする試み
－異文化理解の視点から－

Gehertz 三隅友子

発表者は、2009年3月に8日間の日程で、大学生12名と武漢・上海訪問交流研修を実施した。訪問先は中国の武漢大学及び上海の二つの大学であり、各大学の日本語学科の学生との交流を行った。研修の目的は①日本語を学ぶ中国人学生との対面コミュニケーションを通して友達になること②中国を訪問し実際に異文化を体験し理解すること③さらに参加者それぞれが各自の目的を立てて実践することであった。中国での交流会に備えて中国語会話（自己紹介と簡単な会話）と中国語の歌を留学生の指導のもとに練習し、同時に上演を目的とした日本語劇「ひのきとひなげし（宮澤賢治作）」を準備した。これは、コミュニケーショントレーニングとして外部講師に依頼し、身体的コミュニケーション（こえとからだとかかわりあいを互いに体験学習する）から、最終的に演劇へと結びつける活動であった。そして中国では実際に三大学の日本語学科の学生の前で計3回上演を行った。研修参加者に演劇を課したことによって、準備（2月から出発までに三日間計20時間）そして滞在中また1年を経た今で特に演劇活動の意味の変化を調査した。演劇活動を教育活動とした、実施者のねらいや意図がどれだけ実現され、また参加者や演劇を見たものにどのような反応を引き起こしたかを確認した。

以上の前提を踏まえ、関わった人（実施者・参加者・聴衆等）から得られた情報をもとに本発表では演劇活動の次の点を考察する。

- (1) コミュニケーションに対する認識
(対人関係・身体的コミュニケーション・ことばとからだの関わり等)
- (2) 参加者の凝集性
(学内で募集した参加者が協力関係を構築する流れ)
- (3) 作品を通じた自己理解
(作者のメッセージを演じ手そして聴衆はどのように受け取るのか)

さらに考察を通して、大学における授業以外の教育活動に「演劇」を有用する可能性を提示したい。